

コンピテンシーの  
道程

# 職人の技

シリーズ・45

多田智さん  
絵画修復家

## 画家の熱情を感じながら、 作品が持つ表現力を蘇らせる

単に傷んだ絵画を修理する仕事ではない。

「絵のテーマはもちろん、時代背景、他の作品との関係を考慮し、  
作品が持つ魅力を再現します」

自然劣化や損傷から絵画を守りながら、作品に込められた画家の思いに  
改めてスポットライトを当てる、それが絵画修復師である。

絵画修復師は、言わば絵画の医者だ。表面にヒビが入ったり絵の具が剥げ落ちてしまった絵画を、熟練の技術で状態に応じた処置を行い元の作品の表現力を蘇らせる。病院の医者と同じように、処置前には作品の状態をカルテに記録し、依頼者と相談しながら絵画を“治療”していく。

「基本的には、作品の状態を変えることなく、損傷のある部分のみ修復します。きれいに直し過ぎると作品の魅力を損なってしまう。そのあたりの匙加減は、たくさん作品の処置をしてこななければ見えてきません。絵画の修復を手掛けて20年以上になりますが、修復した後で『これで良かったのかな』と考えることが今でもあります」

山領絵画修復工房の絵画修復師・多田智さんは、仕事の難しさをそう語る。

『失敗したから新品にお取り替えします』というわけにはいきません。どの作品もこの世に一つしか存在しませんから。実際、ピカソの作品を扱った時はすごく緊張しました」

多田さんが修復を手掛ける絵画は、美術館や蒐集家などが所蔵する作品もあれば、画廊が商品として販売している作品もある。修復では、絵の具が剥落した部分や傷ついていた箇所を、接着剤と電気コテを使って補修して、作品全体を洗浄し、場合によってはニス塗って仕上げる。

「画家の描写力や色味の美しさ、その作品の力が再現できるように気を配っています。ほんの一箇所修復するだけで、作品全体の印象が大きく変わってきます。修復によって生き生きとした表情になった作品を見るのが、この仕事の面白いところです」

修復の過程で多田さんは、絵画に残された画家の熱情や息遣いをひしひしと感じることもあるという。

「大家と呼ばれる画家でも、自分の個性を探っている時期の作品は、表現しようという気持ちが荒々しいタッチに現れていたりします。そうした荒々しい箇所ほど、絵の具に亀裂や剥落が発生します。絵画の基本に忠実に、画材の特性を理解した上で描かれた作品ほど壊れにくく、修復で元の状態に復元できる力を持っています。基本がどれだけしっかりしているかが、後の作品の状態も左右するのです」

\* \* \*

山領絵画修復工房は、1970年に日本の絵画修復の先駆者の一人である山領まり氏が開いた工房だ。当時、日本の絵画修復は技術もノウハウも乏しい時代。海外の論文を読

み、海外の研究所での研修を受けながら、山領氏は絵画修復の技術を身に付けてきた。こうした努力によって、絵画に与えるダメージを抑えた修復の技術が確立された。

そして2014年、山領氏は工房の代表を多田さんに引き継ぐ予定だ。美大に通っていた時から山領絵画修復工房で研鑽を重ねてきた多田さんを、「堅実な作業をしっかりとこなす根気強さがある」と山領氏は評する。

一方、山領氏からバトンを受け継ぐ多田さんは、「山領先生は、真似をしようにもできない偉大な存在。自分は今後も自分ができる目の前のことを丁寧にやっていだけです」と謙虚に語る。しかし、そんな言葉の裏側で、今後に対する熱い思いがあるようだ。

「日本では絵画修復の歴史が浅いこともあって、“費用をかけて絵画を修復する”という文化が根付いていません。まだまだ保存状態の悪い絵画がたくさんあるので、これからわれわれが果たしていくべき役割は大きいと思っています。日本では、絵画は美術館に行ってみるものというイメージが強く、部屋に飾って身近に楽しむという人は多くはいません。作品の持っている力を蘇らせることで絵画の魅力を多くの人に伝え、絵画を身近で感じ楽しむ人が少しでも増えてほしいと思います」

小さなころから絵が好きで、絵画修復家としての道を歩み出してから、画家と同じ距離、同じ目線で作品と向き合ってきた多田さん。絵画に対する思いは、誰よりも強い。



#### ただ さとし

1968年、東京生まれ。多摩美術大学絵画科在学中から、東京都武蔵野市にアトリエを構える山領絵画修復工房に所属。工房で絵画修復に携わる一方で、「カブトくん」(こぐま社)、「むしのもり」シリーズ(小学館)など、絵本作家としての顔も持つ。写真左が、山領絵画修復工房を主宰する山領まり氏。

